

第3期札幌文化芸術円卓会議 第1回会議

会 議 要 旨

日 時：平成26年1月28日（火）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 1号会議室

1. 開 会

○事務局 本日は、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

定刻前ですが、皆様おそろいですので、始めさせていただきたいと思います。

ただいまから、第3期札幌文化芸術円卓会議の第1回会議を開催いたします。

委員長が決まるまでの間、事務局で司会をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 文化部長挨拶

○事務局 それでは、開会に当たりまして、文化部長より、一言、ご挨拶を申し上げます。

○文化部長 皆さん、どうもお疲れさまでございます。

本日は、大変お忙しい中をご出席いただきまして、まことにありがとうございます。

また、日ごろより、本市の文化行政にご理解とご協力をいただいておりますことに対して、深く感謝を申し上げます次第でございます。

さて、皆様もご承知のように、札幌市の文化芸術行政は、札幌市文化芸術振興条例という議員立法でできた条例と、これに基づいて定められております札幌市文化芸術基本計画を指針として現在進めているところでございます。この条例と基本計画の中に、市民と芸術家と文化芸術活動団体などと行政が自由かつ率直に意見交換を行うことが盛り込まれており、その仕組みとして設けられておりますものが、本日ここに開催いたします円卓会議でございます。

今回は、市が選任させていただきました委員、公募による市民委員を合わせて9名の皆様に委員を委嘱させていただきました。各委員の皆様は、それぞれの専門分野で大変すぐれた実績を残されている方や、札幌の文化芸術を盛んにしていきたいという強い思いをお持ちの方ばかりでございます。

本日は、まず事務局から、過去2回、円卓会議を開催されているわけですが、これまでの議論の報告書である文化芸術円卓会議からのメッセージについて説明させていただくことになっております。委員の皆様には、こちらのメッセージの内容なども十分参考にいただきながら、さまざまな角度から、札幌市の文化芸術のあり方、あるいは、市民、芸術家、行政の役割などについて意見交換をしていただきたいと思いますと考えております。

この円卓会議は、来年3月まで1年間、会議を重ねていく予定でございますが、その内容が大変実り多いものとなることをご期待申し上げるとともに、本日ご出席の皆様方がますますご活躍されますことをご祈念申し上げまして、簡単ではございますが、私の冒頭のご挨拶にかえさせていただきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

3. 委員の自己紹介

○事務局 続きまして、委員の皆様のご紹介でございます。

恐れ入りますが、自己紹介でお願いいたします。お名前と文化芸術活動とのかかわりなどについて、お話しただければと思います。

それでは、石川委員から反時計回りで順番にお願いいたします。

○石川委員 ふだんは、普通の勤め人です。ただ、趣味で、フリーペーパーをずっとついたり、まちづくりに関するフォーラムを主催したり、最近は大学のゼミに呼ばれて、情報デザインに関してレクチャーをしております。よろしくお願いいたします。

○尾崎委員 私は、主に舞台芸術の裏のスタッフとして携わっております。舞台監督、舞台の全体的な進行を行ったり、舞台美術や照明のデザイナー、演出家と一緒に舞台をつくり上げていくことを行っております。よろしくお願いいたします。

○北村委員 こんばんは。北大の北村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

芸術学あるいは美学が専門でございます。

今は、札幌市で500m美術館の委員を仰せつかっております。芸森の美術館の財団の委員などをやらせていただいております。

毎日、楽しく過ごしております。芸術によって豊かな人生を築けていると思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

○清水委員 こんにちは。私は、芸術の担い手ではなくて、とにかく享受するばかりの立場にある者です。大学進学で札幌に住むようになって、本当に札幌というまちが好きで、一生住みたいと思いました。その理由は、一般の人が芸術文化を享受できるレベルがほかのまちに比べて非常に高いと思っています。私が札幌を好きな理由の一つとして、そのすばらしさが大きいです。享受する側としても、何か意見や思っていることを担い手の皆さんに伝えられたらと思って、こちらに立候補しました。

よろしくお願いいたします。

○鈴木委員 よろしく申し上げます。

私は、生まれも育ちも北海道で、恐らく芸術文化に初めてかかわったのが芸術の森のジャズスクールで、いろいろなところでスタッフとしてお手伝いさせていただいております。皆様と違って知識や経験で少し劣る部分があると思いますが、自分なりの意見を出していけたらなと思います。よろしくお願いいたします。

○伊委員 初めまして。

先ほどのお話にもありましたが、私自身、札幌市に来たときは、日本ぼくなくて日本ぽいというか、海外のような国内で、雪が降ったら風景も変わり、まち自体がすごくアーティスティックで、とてもすばらしいまちだと思っています。

今回、広報さっぽろのこちらの応募を見かけまして、文化芸術がただ好きだというだけで、本当に皆様に比べたら恐縮するばかりで、ここにいていいのだろうかとも思っておりますが、一市民の感覚として、何か役に立てればいいなと思いますので、どうぞよろし

くお願いいたします。

○山田委員 札幌市芸術文化財団に勤務しております、舞台芸術の主催事業を担当しております。

アートと自然が一緒になったところに市民が来てくださっていて、よりよいところになればいいなと思いつつ、今いる札幌市教育文化会館でも、伝統芸能からオペラ、お笑いまで幅広くやっております。どんどん市民の方々が足を運んでくださるように、ひいては札幌全体が芸術文化で盛り上がりたければいいなと思っております。

よろしく申し上げます。

○南委員 こんにちは。北海道教育大学岩見沢校で教授をしております。

専門は音楽です。音楽の中で何をやっているかということ、作曲が専門で、大学に勤めるまではずっと作曲家業をやっておりました。

それ以外にも音楽にかかわるようなことで、例えばK i t a r aの企画運営委員をやらせていただいたり、少し前まではPMFのお手伝いをさせていただいたりしておりました。

○富田委員 こんにちは。

僕は、実は、札幌で市立大学の前身の札幌市立高専というところでデザインの勉強をしていましたが、思うところがありまして、就職してから、今は現在美術のアーティストとして活動しています。

やはり、このお話があったときに、未来の話ができるのはすごく重要なことで、また、いろいろなお仕事をされている方と広い視野で話をできるというのが、僕がここにいる理由の一つであります。これからの札幌の力になればいいなと思っております。

よろしく申し上げます。

○事務局 ありがとうございます。

なお、この円卓会議につきましては、公開とさせていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

4、委員長、副委員長の選出

○事務局 それでは次に、委員長、副委員長の選出を行いたいと存じます。

選出につきましては、お手元の札幌文化芸術円卓会議設置要綱の第4条にありますように、委員の互選により、委員長、副委員長を選出することとなっております。

(互選により、委員長には北海道大学教授の北村委員、副委員長には北海道教育大学教授の南委員を選出)

○事務局 それでは、北村委員長、南副委員長から、一言、お願いいたします。

○北村委員長 改めて、北村でございます。

条例では自由かつ率直なご意見を伺うということなので、上座、下座ございませんから、ぜひ丸くなったつもりでご発言いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○南副委員長 南です。

いろいろ気楽に話せる機会になればいいなと思います。どんどん発言していただければと思いますので、よろしくお願いします。

○事務局 それでは、これから先は、北村委員長、南副委員長に会議を進めていただきます。よろしくお願いいたします。

5. 議 事

○北村委員長 よろしく申し上げます。

では、お手元にある会議次第に従って議事を進めさせていただきます。

先ほども言いましたように、平成21年度から22年度にわたって第1期の円卓会議、23年度から24年度に第2期の円卓会議を実施していて、私たちは第3期目になります。

いきなり始まるわけではありませんので、第1期、第2期の過去の議論をしっかり理解した上で私たちの仕事をこれからどうすればいいのかを見据えていきたいと思っています。

まず、事務局から、第1期、第2期について議論の説明をお願いいただけますでしょうか。

○事務局 早速、第1期のメッセージについて説明させていただきたいと思っています。

第1期につきましては、平成21年度、平成22年度にかけまして、計8回の議論をしていただいております。

本市推薦の方と市民公募の方を合わせまして9名で議論をいただいております。学識経験者、演劇財団、オペラの演出家、演劇監督、自営業などの9名から成る方々に計8回にわたって議論をさせていただいております。

議論をしていただいた内容をメッセージという形でまとめていただいております。

(第1期のメッセージ内容について説明)

この内容が、まず1期目の円卓会議の内容になります。

これを受けまして、2期目の円卓会議が平成23年度、24年度にかけて行われております。こちら、計8回の会議を行いまして、学識経験者、演出家、学生、主婦、オペラ団体、太鼓の団体の代表等々の10名に議論していただいております。

議論していただいた内容をまとめたものが平成23年度、24年度円卓会議からのメッセージとなっておりますので、こちらを説明させていただきます。

(第2期のメッセージ内容について説明)

これが2期目の円卓会議の内容となっております。

3期目のメンバーにおかれましても、できれば円卓会議からのメッセージという形でまとめていただければと事務局では考えております。

事務局からの説明は以上でございます。

○北村委員長 ありがとうございます。

平成21年度から始まって、2期にわたってメッセージを受け取って、私たち3期目が

あります。

何かご質問がございますでしょうか。

1期目の佐々木先生は、博物館学で、美術館の評価などがご専門ですので、まずは、札幌市の芸術文化がどういう状況かという評価をされて、それからどうしようかということで、三角構造ですね。市民と市とアーティストの3者をどういうふうに連結させていくか、その中心的なキーワードとして産業化をお考えになったということだろうと思います。

2期目の委員長をされた伏島さんは、地域創造やまちづくり、文化行政に強い関心をお持ちの方ですので、この3者構造を芸術の産業化というキーワードで循環させていくのであれば、具体的にどんなモーター、ダイナモになるものが必要なのかを考えて、アートセンターを現実的に考えていきたいと思いますという提言になっているのだと思います。

皆さんから何かご質問はありますか。

ただ、札幌の行政の中でも、この4年間で、500m美術館がオープンしたり、去年の暮れに創造都市のメディアアートのネットワークに参画するようになりまして、国際芸術祭が開催されることが決まっていますし、今言ったように複合施設の建設も現実的になっています。実際にいろいろ動いている状況があると思いますが、今、札幌市はどのような芸術文化の状況にあるのかということをお話いただければ、私たちの仕事がもう少し具体的に見えてくるかと思いますが、どうでしょうか。

○事務局 北村委員長がおっしゃるとおり、札幌市では、500m美術館の設置や、ことし開催される札幌国際芸術祭、ご存じのとおり創造都市さっぽろを目指しておりまして、メディアアーツ都市として今後進めていく形になっております。その中で、まちづくりを進めていく中で文化芸術は非常に大切だと我々は考えております。

そこで、これから説明するのですが、文化芸術基本計画がございます。これは、平成21年度に策定しまして5年間の計画ですが、今、策定しているのは26年度以降5年間のものです。その中で、今、札幌市の情勢は大きく変わろうとしております。その情勢を踏まえた上で、札幌の文化芸術施策をどのように展開していくかを別の委員会で検討している最中がございます。それを担当から説明させていただければと思いますので、よろしくをお願いします。

○北村委員長 では、その説明を受けてから、全体で議論したいと思います。

では、事務局からお願いいたします。

○事務局 では、概要をご説明させていただきます。

(現在策定中の、札幌市文化芸術基本計画について説明)

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。

第1期、第2期の提言、メッセージをどういうふうに受けとめるのかを私たちが改めて考えればよいと思います。

1期のときの指摘として、施策が非常に総花的になっているので、もう少し交通整理をして、市民、企業や役所、アーティストがどういう担い手になるのかを比較的固定して考えられていたようにも思います。そこで、なるべくそれを回そうという形で産業化というキーワードを出しています。市民や企業、あるいはアーティストや役所は、固定した役割を持つのではなく、市民はただ一方的に受け取るだけではなくて、時には創作活動にみずから参加するような場も担わなければいけないという視点で動いてきたという気がします。

その中で、第2期は、アーツセンターが心臓部になって、これからの札幌の芸術文化を回していこうというのが提言のようです。実際にどういう仕組みで動かして、どういう役割を果たしていくのか、また具体的な形としては見えにくいところもあります。

そういう議論があって、では、実際に次の平成26年度からの文化芸術基本計画をつくるに当たって、札幌市としてはどういう現状認識をしていて、どういう取り組みをしていて、将来5年間はどのような方向に向かおうかという方向性を見定めているようです。

書いてあることは、一つ一つとても立派なことで、けちをつけるところはないと思います。では、それが具体的に私たちの現実の問題としていえば、第1期の円卓会議の課題の総花的なところが依然としてあります。1期目の円卓会議で指摘されて、すぐに取り組みべきだ、こういうことをやるべきだという提言が出るぐらい実現しているのか。もし全部実現しているのであれば、円卓会議ももしかしたら不要かもしれません。なおかつ、まだ成果が満たされていないで、こういう基本計画をつくったり、分析をしたり、将来の構想を常につくり続けなければいけないということで、どういうところが問題点としてあるのかということを私たちはもう一回考えなければいけないと思います。

事務局から、第1期、第2期のメッセージから、次期基本計画の見直し案の概要を説明していただきました。まとめて何か質問なり議論の観点なりがありましたら、どうぞご自由にお話しいただきたいと思います。

○南副委員長 私からお話しします。

まず、産業化という第1期の言葉ですね。文化は、本来は遊びです。遊びとは何かというと、衣食住からプラスアルファの部分で、どのくらい遊びができるかというのが基本的に文化だと思います。ところが、産業とは、経済機能を持っているわけですから、どうしても衣食住の最低限のところに付加していくものが多いわけです。文化が遊びであるということは、実は、ある意味では無駄な部分でもあるわけです。無駄なものにどのくらいたくさんお金を出せるか、それがある意味で文化のレベルの高さを示しているのではないかというイメージを僕は持っているわけです。

その中で、産業化という言葉とともに、経済化が意識され過ぎてしまうと、経済的にも効率が悪いから、芸術、アートはそんなに力を入れないようにしよう、こっちは人気があって、経済効率が非常に高いから、この文化にはたくさん力を入れていこうといった思考が出てくることをどのような形で押さえる必要があるのか、あるいは、全く押さえなくていいのか、その辺も1期目の産業化という言葉はどう捉え直して語っていくか、つないでい

くべきかということが一つあると思いました。それに関して、皆さんの意見も聞きたいというのが僕の感想です。

もう一つは、たくさん出てきているわけですが、2期目の中心のセンターです。そこにみんな集めるという話があるわけですが、そのセンターだけが突出してしまわないようにしなければなりません。札幌市は、190万人の人口がいる大きなまちです。その190万人のすそ野の部分まで、つまり、もっと手短な町内会におけるアート性、もしくは、駅前の商店街におけるアート性とセンターのつながりですね。例えば、10区という言葉が出てきましたが、1区20万人の規模があります。1,000人規模の中における活動と、1万人、10万人、20万人の規模の中での活動は、それぞれあり方や形も違うと思います。そのような多層構造を持っているわけで、それを実際的にどのように構築していくかということです。

実は、言葉で書くといろいろたくさん出てくるけれども、もっと単純に、芸術の産業化によって期待される効果とあって、その結果があるわけです。その結果、例えば観光客がふえるという言葉があったとして、文化人が多く住むまちとしての魅力アップという目的からどういうふうにしていくとこうなるかという逆の方向からのリサーチも意味があると思います。

それから、札幌のまちはとても魅力的ですが、その中でアートはまちの中にどのように入ってくるのかということです。要するに、シティアート、環境としてのアートです。例えば、文化芸術意識調査の郵送アンケートの効果やニーズを見ると、やはり、「市民が生きがいや親しみを見いだせる」が53%になっていたり、「子どもが心豊かに成長する」が突出しています。それから、観賞しやすい環境づくりに対するニーズも、「チケット料・入場料を安くなる」や「情報がよりわかりやすく提供される」とあります。その下の結果を見ても、情報提供が42%ありますし、子どもの教育の場も高いです。どういうところに効果を要求しているのか、あるいはニーズがあるかということもはっきり見えているわけですから、これらのために具体的にどういうふうにしていったらいいのかということも考えるべきだと思います。

その辺は、皆さんでどういうふうにお考えになれるか、投げかけてみたいと思いました。
○北村委員長 ありがとうございます。

芸術文化と産業化は必ずしも合わないかもしれない、経済効率だけを考えるのではない方向性も必要ではないか、あるいは、アートセンターをつくるということで、第2期でも10区との関係を言っていますが、センターと周辺を考えると、区なのか、町内単位なのか、周辺との関係性をどういうふう構築していくのか、こういう文化芸術によってどういう効果が得られるのか、でも、求められている効果に対して逆に私たちはどういう取り組みをすればいいのか、そういうことを南副委員長はお聞きになっていますが、何かご意見はありますか。

○富田委員 僕は、札幌の文化度が高い、もう既にあるというお話をされたのがすごく印

象に残っていますが、それはどういうところですか。

○清水委員 芸術と文化という単語が余りにも広義的過ぎて、その人によってイメージするものが違うから、芸術家から見たら、低いとと思っているのかもしれませんが。しかし、私は、アクセスしやすいところかと思います。

私は、他都市出身で、子ども時代から高校生まで過ごしましたが、図書館が余りないのです。私が住んでいたところからでしたら、バスに50分乗って行かなければいけないし、行っても当時は古くて暗い建物で魅力的ではないです。そういうところに比べたら、札幌は便利だと思います。特に、今、私が大学生のときよりも、営業時間が延びたり、大通で借りたり返却できますので、本当にすごく便利になっています。そういうアクセスのしやすさですね。

文化といってもいろいろありますが、例えば、大通公園でしょっちゅうイベントをやっています。食のイベントが多いですけれども、短編映画祭やジャズもそうですし、本当に楽しめるものをしょっちゅうやっていて、一般市民が気軽に楽しめると思います。私にとっては、地元に住んでいるより札幌に住んでいるほうが楽しいのです。本当に気軽にいろいろなことを楽しめます。

ただ、ディープなアートではないと思います。私は、本当に小さい劇団の演劇を見にいっているわけではないです。だから、そういうところでレベルが高いとか、それを子どもが見て目指すという感じのアートについてレベルが高いと言っているのではないです。

○富田委員 アクセスがしやすいということですね。

○清水委員 とにかく触れやすいです。

○伊委員 文化芸術と言うと、すごく敷居が高いようなイメージを持ってしまいがちだと思います。先ほどもおっしゃっていたと思いますけれども、私が札幌に来て最初に驚いたのは、札幌市内は公園の数が半端ではなく多いと思います。公園が多かったり、先ほどもおっしゃったように、イベントの数の多さが半端でないと思います。そして、みんなが気軽に参加できるのですけれども、それが文化芸術やアートというところと結びついていないと思います。市民は、実は気軽にアートや芸術文化に触れているのですが、気づいていない部分であったりすると思います。

例えば、新聞を見ると、きょうかきのうも出ていたのですが、小さな劇団の演劇がたくさんやっていたり、ジャズだったり、いろいろなことがたくさんなされています。しかし、先ほどお話があったように、産業化となってくると、むだなものにはお金をかけずに利益が出るようにと考えがちかもしれません。アーティストは、発表する場が一番大事であって、私も発表するときに、まずお金がかかるのです。それをどこから集めるか、寄附で集めようということ、志が強くないとなかなか実現できません。それをどうやって気軽にできるかというところで、これを読むと、すごくいいことも書いてあるのです。本当にすばらしくて、皆さんもおっしゃるように、ここから何を議論すればいいのかというぐらいでき上がっています。でも、これを市民が知っているかというと、私も一市民として全く

知らなかったという部分が大きいです。

産業化と関連がつくと思いますけれども、広報活動ですね。会社で商品を出せば、CMを打って、広告を打って、テレビCMと連動して、ふと目につくところにポスターがあって、本当にうまくできているなと思います。いいところをつかんでいるなと思います。

こういうすばらしい政策があるのに、私や清水委員は一市民ですけれども、興味を持っている人しか気づかないのです。

アーティストとは言わないですけれども、一趣味で芸術をやっている方が発表する場をこことうまく連動させていくというか、さっきもおっしゃったように、視点が下がってきているのではないかという共創という部分で、もっともっと視点を下げて、市民レベルから発信できるようにして、それを吸い上げる行政であってほしいと思います。

今は、本当に高みの部分でいいことをやっています。しかし、例えば、私が踊りをしていて、いろいろな踊りの舞台を実施したいので、市で協賛できませんかという形で持っていったいいのかが全然わからないし、見えません。まずは、こういうことをやっていて、市民みんながいろいろなアートに触れ合っていますし、それを自分が主体として参加できることをもっと宣伝することをもう少し考えていかないと、やっていることはいいことで、結構なお金も使っているであろうけれども、それが生かされていないのがすごく残念でたまらないなと思います。

○富田委員 いろいろいいお話をいただいたと思います。

僕も同じような思いを持っています。土を耕すのでも、では、何の種をまくのかが物すごく重要なわけです。概観はおぼろげにわかるのですけれども、では、何を担っていけばいいかに関しては、一つ言いたいことがあります。

担い手は、発信したり育てるといふふうには書いてありますが、世界と結ぶということを考えているのであれば、まずは、観光客を呼ぶや来てもらうではなくて、こっちから行かないとだめだと思います。なぜかという、アートは、メディアで接したり、映像で見たりするもので完全に感じられるものではないというか、体験できるものではないと思います。ただ、呼んできてトークをしてもらう、エキシビションをやってもらうことではなく、こっちから人が行くことも含めてぐるぐる回らないと、世界と結んだことにはならないような気がしています。

僕は、人を中心に考えて見ていったほうがいいと思います。これは、やはりどうしても仕組みの問題ですけれども、例えば本当にキーパーソンがコミュニティーの中でも1人いて、その人がおもしろい活動をしていたら、その人を見ていて、僕にはこういうやり方があるというようなことを考えたりします。

仕組みが用意されていたり、アーティストが育つ助成があったり、場所が用意されていても、僕はアーティストにとってそれがいいかどうかは、ちょっと疑問です。ただ、お金の補助があったりするのではなくて、やはり、アーティストのプレゼン能力をある種の競争というか、コンペティションを促すような形でないと、ただサポートします、お世話

をしますというのは、アーティストには合わないと思います。

やはり、表現をしたいことがあるから、それを表現するのであって、やはりアーティストが考えて世の中に出していくべきものであって、それをうまく支えてあげる方法ならわかりますが、お世話はどうかと思います。

○南副委員長 お世話は2通りあって、アーティストをサポートする場合もあるでしょうけれども、もう一つは、そのアーティストが何か表現しているのを知りたい、それがおもしろいかもしれない、見たいほうのお世話は意味があると思います。そのアーティストがやっているけれども、それがもう少し見えやすく、それが何かわかりやすく知りたいという部分のお世話は一つあると思います。

○富田委員 それはわかります。

○北村委員長 鈴木委員は、ボランティアで、お世話ではないと思いますけれども、かなり積極的に活動を半年間やってきたと思いますが、どうですか。

○鈴木委員 私は、ミュンヘン・クリスマス市とシティ・ジャズと500m美術館と札幌オペラ祭のお手伝いをさせていただいたのです。アーティストの方々を見てきて、私の予想ですけれども、恐らく札幌市のアーティストの方々は、もう少し競争率というか、緊張感のあるような場を望んでいるのではないかと思います。

オペラ祭のときに思ったのは、技術が高くてノルマを払えないから主演ができない方がいらっしやいました。そういう方たちは、お世話というか、自分の活動をする上で足りない部分を補っていただくという面で、必要かと思います。

別の話で、中心地だけではなくてほかの場所のことも考えたほうがいいのではないかと話がありました。道で考えるとしたら、E20があります。札幌市の方々がプロデュースした作品を海外に発信するようなプロジェクトを前にされていたという話をお聞きして、そういうふうにしてコンペティションみたいなものを海外に出しますよ、そのために若手の方たち頑張ってくださいという施策を市で取り仕切っていただけたら、もしかしたらいい方向に進むのではないかと思います。それを目につけた企業の方や、そこから札幌市のアーティストの可能性も大きく視野に入ってくるきっかけになるのではないかと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

行政は、どうしても仕組みをつくるのが主になってしまって、その仕組みができれば上がりみたいなところがあるのかもしれません。

山田委員、オペラのことが出ましたけれども、山田委員の立場だと、半分行政的なところがあって、半分は実際にプロモートするという両方の側面があると思います。

○山田委員 今、鈴木委員の話にあったオペラの歌手は、技術があっても、何百枚も売らないと主役を張れないというのが現実にあります。

そこについては、先ほどお話があったお世話といいますか、どんなふうにサポートをしていけばいいかということですね。私たちも、チケットを販売します。オペラの団体の方々

も、以前は、ノルマがあって、まさしく手売りでやっていました。それが、今は、教育文化会館にプレイガイドがありまして、そこでも少しずつ売れるようになってきています。ほんの少しですけれども、そういうことが出てきています。ということは、そこに足を運ぶ人がいて、その足を運ぶ人はどうやって情報をつかんだかということが出てきます。

先ほど清水委員の話にもありましたけれども、意欲があって情報をつかむ人がいて、プレイガイドに来ることになります。もう一つは、私たちもアンケートをとっているのですが、今の反対で、どうやって芸術文化の情報をつかんでいいのかわからないのです。教育文化会館はもっと宣伝しなさいというのは、今もアンケートにあります。なので、これだけ芸術文化が盛んと言われている札幌の中でも、まだまだ届いていない、あるいは、興味がない方へ情報の伝達をもっともっとする余地があると感じています。

先ほど産業化がありましたけれども、ここを考えると、大きく本当の産業が動いて企業として収入もあって成り立つのが一つです。もう一つは、富田委員たちのように、アーティストが食べていける、いけないがあります。どこかにその言葉がありましたけれども、その取り組み方で深さが結構違うと感じました。

そこで、一つ質問です。

第2期の円卓会議の中で、札幌版アーツカウンシルがありました。意味や雰囲気はつかんでいるのですが、これからのステップに行くに当たって、定義や、具体的にどうこうではなくて、札幌市ではどんな雰囲気をもって札幌版アーツカウンシルが2期で残ったのか、それを教えていただけるとありがたいです。

○事務局 事務局からお答えさせていただきます。

まず、アーツカウンシルとは何かという方もいらっしゃると思います。アーツカウンシルとは、独立性や専門性がある、その中で民間の文化芸術団体等を支援する公的団体という定義となっています。ヨーロッパでは、結構普及しておりまして、行政から独立した形で専門家の人たちがこういう団体にこういった形で補助したほうがいいというような仕組みが主流となっております。

ただ、日本では、アーツカウンシルがまだ進んでいないところがあります。それこそ、今、東京や大阪でアーツカウンシルについて研究している最中でございます。札幌市も調査研究をしている段階にとどまっているのが現状でございます。

○山田委員 ありがとうございます。

○北村委員長 尾崎委員は、舞台にもかかわっておられて、会社であれば経済の問題にも当然かかわってくるとは思いますが、何かありますか。

○尾崎委員 産業化というのは、すごく難しい問題です。当然、ある程度の競争がなければいけません。それは、経済的な競争ではないですけれども、数値化しやすいからそれをもって見てしまうところがあって、本当はアーツカウンシルなり評価する機関があれば、経済的な評価だけではないところを評価するところがあれば、多分、両立していくのだと思います。しかし、今、僕らは片方しか想像できていないというのがなかなか進められな

い理由の一つかと思えます。

海外では、そういう機関が成立していて、日本では難しいとなっていますが、大阪、東京で調査が進んでいます。市民としては、大阪、東京より先行して札幌が名乗りを上げていく、それが国際的な活動の大きな原動力になってくると思えます。そういったところは進めていくのがいいと思えます。

これは、昭和38年の札幌市民憲章からも「世界とむすぶ」とずっとうたわれているわけです。そうなるためにはどういうところが必要かといったら、やはり、そういう機関かと思うので、人口が多くお金のある東京、大阪、名古屋、横浜より先駆けて基幹産業のない札幌市がそういったところで世界とつながっていくと、わくわくするまちになるのではないかと思えます。

○北村委員長 ありがとうございます。

石川委員はどうか。

○石川委員 平成21年度、22年度芸術文化円卓会議の資料に関しては、皆さんが言っているとおり、本当にごもつともだと思えます。ただ、その反面、こんなにきれいなサイクルなんてつくれないと私は思っています。富田委員は動的とおっしゃっていただけども、僕は、もっと3次元的にぐちゃぐちゃしているものだと思っています。この平成21年度、22年度のメッセージに関しては正解だと思います。では、この正解をつくっていくにはどうすればいいのか、具体的な方策や実務を考えなければいけないと思えます。そういうことが必要かと思えます。

芸術文化が人間に欠かせないものであるのであれば、どこかが音頭をとって、市役所の全部署を挙げて芸術文化に対して協力できるような体制やルールはある程度あったほうがいいと思えます。勝手なことばかり言っていますが、やはり一つの部署だけ頑張るよりも、市民生活にかかわる芸術文化ですから、ほかの福祉の部門であったり、技術的な部分であっても芸術文化に関与することはできると思えます。ただ、今もそういう協力をするにはあるかもしれませんけれども、一時的な協力体制や個人的な力での協力体制ではなくて、明確なルールづくりができればいいと思いました。一つの部署だけが頑張る芸術文化を盛り上げようとして、ほかの部署は関係ないというのではなくて、例えば国際芸術祭をやるとなったら、札幌市の全部署が協力してやろうみたいなルールづくりがあればいいと思いました。

平成23年度、24年度に関しては、アートセンターをつくりたいとあります。それに関しても、もちろん賛成で、反対する理由はありません。ただ、アートセンターを考えたときに、ハードウェアとしてのアートセンターがあると思えます。いい場所にある建物ですね。また、ソフトウェアとしてのアートセンターもあると思えます。それは、アートセンターの役割や機能です。ソフトウェアのアートセンターは、さっさとつくってしまっていると思えます。今、ウェブサイトなどがありますし、本当に必要ならば、無料で使えるフェースブックやユーチューブも今や普通の企業が広報のために利用する時代になってい

ますから、メディアとしてのアートセンターを先につくってしまって、そこでいろいろな人の意見を集約してはどうかと思います。実際に、札幌市に住む人の意見やアーティストの意見、市民の意見を聞いていかないと、アートセンターができてから、実はこういう機能が欲しかったというのが後々に来ても、もうどうにもならないことがあります。ある意味、理想のアートセンターをつくるにはという情報を先に立ち上げてしまって、そこでいろいろな人の意見を集約したり、最終的にはアートセンターができた後もソフトウェアのアートセンターで一番重要なのは、札幌のアーティストやアーティスト志望者、アーティストを見たい人のコンシェルジュ的な機能というか、何かアートのことで作品を発表したい、札幌にどんなアーティストがいるか相談できるような機能を持たせてくれるといいと思います。そして、アートのことに関して何かわからないことがあったら、札幌市のアートセンターのサイトに聞いてみようという雰囲気づくりができればいいと思います。

個人的には、ボランティアを活用することも一つ考えたほうがいいと思います。もちろん、ボランティアはコスト低減ということもあるのですが、実際に札幌に住んでいる僕のような普通のサラリーマンや普通の生活をしている人が美術やアートに関することによって、札幌は創造都市や文化芸術のまちだと意識させるためにも、ボランティアの積極的な起用が必要かと思います。例えば、実際にアートセンターのハードウェアができたなら、事業委託で丸投げみたいなことをするのではなくて、難しい部分が非常に多いとは思いますが、全部をボランティアで回すということができればいいと思います。

言いたいことはもっとたくさんあるのですが、この辺でやめておきます。

○北村委員長 ありがとうございます。

市民レベルで、余りディープではないもの、ただ、市民の皆さんが自分の周りで実はアートや文化などと言わなくても、札幌にはアクセスしやすいイベントがいっぱいあって、そういうものをもっと広報して市民に近づけるようなルールが必要だというお話がありました。また、もう少しディープなところで、札幌から世界に打って出ていくようなところで、人材をつくるようなこともありました。ボランティアのサポーターのお話をされただけでも、もしかしたらサポーターではないのかもしれないという気がします。今、市民とアーティストをつなぐコミュニケーターというか、中間のつなぎ役の人がどこにでもいて、例えば500m美術館に行ったら誰かいて、これは何かと聞いたら、これは何々ですと答えてくれるような人がいて、あちこちの劇場にもいて、センターにもいて、美術館にもいて、まちの中もいて、公園にもいるという形で、かかわり合いができるようになってもいいと思いました。

また、産業化の問題で、経済的な活動と芸術の問題で、アートセンターをつくってどういうふうにお金の配分をしますか、団体を評価するかということが問題になってくると思いますが、そういう仕組みをこれからどういうふうにつくっていくのか。産業化というキーワードを見直して、あるいは固定的な概念図を見直して、単なる仕組みではなくて、現

実に動いていくような、生きているような、血が流れているような形で私たちが血液の一滴となれるかどうかが大らかなという感じがしています。

きょうは、まだ1回目なので、余りオーバーヒートされると持ちません。先は2年近くありますので、これからも存分にご意見を言っていただきたいと思います。

それでは、これからの進め方について、松平係長からお願いします。

○事務局 熱い議論をありがとうございました。

今後の進め方については、本日、事務局から説明したばかりで、皆さんは考える時間が必要かと思います。後ほど、今後のテーマ、今後の進め方、その他ご意見について、1枚記入していただきまして、事務局に提出していただきたいと思います。それを取りまとめまして、第2回目の会議に提示させていただければと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○北村委員長 皆さんのもとに、A4判の紙が1枚あると思います。きょういただいたお話で、皆さんそれぞれのお立場で関心のあることがあると思います。それを少しずつ整理して、ディープなところでしなければいけない話や、市民レベルで、一般的なレベルで190万人みんなのために語らなければいけないところもあります。それをどういうふうに回していくのかなど、いろいろなことがあると思います。

今、この紙を1枚お回しいただきましたので、きょうお感じになったことなどをおまとめいただき、事務局に提出していただければ、それをまとめて、私たちの関心の焦点を少しずつ合わせていければと思います。

そういう形でよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○北村委員長 それでは、きょうは大変お忙し中をありがとうございます。

これから、皆さんと意義のある時間を過ごしたいと思いますので、きょうを機会に、どうぞよろしくお願います。

これで、本日用意していたことは全部済みましたので、事務局にお戻しいたします。

○事務局 皆さん、活発なご議論をありがとうございました。

6. 閉 会

○事務局 それでは、これで、第3期札幌市文化芸術円卓会議の第1回会議を終了いたします。

次回も、またよろしくお願いいたします。

本日は、どうもありがとうございました。

以 上